

人間の経済

Ningen no keizai.

66

目次

Seyfang, G. and K. Smith (2002) *The Time of Our Lives: Using time banking for neighbourhood renewal and community capacity building*, London: NEF.
邦訳サマリー：泉留維（いずみ・るい）

哲学 への いざない （ 1 3 ） 岩田 憲明

Seyfang, G. and K. Smith (2002) *The Time of Our Lives: Using time banking for neighbourhood renewal and community capacity building*, London: NEF.

邦訳サマリー：泉留維（いずみ・るい）

第一章 導入：私たちはどのようにして信頼を築き、コミュニティを繋ぐのか

荒廃地域は、失業率が高く、児童が少なく、豊かな地域と比べて平均余命が著しく低下傾向にある。コミュニティを再生し、信頼関係を築き、住民同士が語り合っていくことで、荒廃地域から脱却することが求められている。イギリスにおいては、人種的マイノリティの70%が荒廃地域に住んでいる。コミュニティの能力を構築することにおいて、人々の能力を導くことに投資するために中心的な公共サービスを奨励し、社会資本と住民同士が助け合える信頼や連帯の成長を促進するということが、荒廃地域を持続的な成長と繁栄に向かわせる重大なポイントである。

タイムバンクは、今の経済のゆがみの中で「汝、汝の隣人を愛せ」という古いコンセプトを持っている。多く人は、私たちが貨幣と時間という二つのものを持っていることに気づかず、貨幣を成功の基準とし、貨幣を持っていても時間がないことが質の低い人生であるとは思っていない。時間はとても使い勝手のあるものであり、市場経済の手が届かない部分、人間関係の醸成、社会ネットワークの構築、友人や隣人や家族といったコアエコノミーの構築を行うことができるのである。タイムバンクは、人々のニーズを満たすのを助け、コミュニティの能力の開発といった従来の方法でコミュニティの凝集や社会への参入といった問題に取り組むものである。それを行うために通貨として「時間」を用いる。

タイムバンクは、イギリスにおいて、1998年に最初のタイムバンクが設立されて以来、急速に広がっていき、現在では運営中と導入準備中を合わせると50以上にもなる。タイムバンクは、近隣を一新する道具として、そして社会・経済・政治的市民権の否定を意味する社会的排斥に立ち向かうものとしての可能性がある。これらの要素は相互に関係しており、貧困によって単純に定義されるものではない。社会的市民権とは、私たちが支援してくれる社会構造やネットワークの発展や維持に関することであり、それらに属しているかという認識に関係する。経済的市民権とは、所得を稼ぐ能力であり、適当な金融サービスにアクセス能力に関係する。政治的市民権とは、自らの人生に影響を及ぼす重大な決定への能力に関係する。

このレポートでは、次の4つの疑問を調査した。

イギリスのタイムバンクは、荒廃したコミュニティのニーズを満たすことを助けられるのか、そして社会的排斥に立ち向かうことができるのか。

様々なグループ、特に若者や人種的マイノリティへ伝える困難さを打破できるか。

タイムバンクは、コミュニティの能力を構築し、各種の市民権を磨くことができるのか。違いのあるコミュニティ間での理解や尊敬を育てられるのか。

イギリスのタイムバンクから得た教訓は何であり、どのように改めていけばよいのか。

第二章 タイムバンクとは

タイムバンクとは何か？

タイムバンクは、実際には「時間」ではなく、人々の能力や地域の資源を貯める銀行であり、交換を促進するために貨幣として便宜的に「時間」を使うのである。

参加者は、電話や郵便を通じて、それぞれのニーズを現し、それを仲介者が結びつけ、タイムキーパーを使って交換を記録していく。

タイムバンクは、各種のコミュニティ機関と住民の間にネットワークを構築し、コミュニティの健康度と福祉を向上させる。またタイムバンクは、コミュニティグループやボランティア組織、政府機関によって従事した参加者を報いる道具としても用いられている。

タイムバンクがなぜ必要なのか

経済には、貨幣を用いて取引をする市場経済と、家族・友人・近隣・コミュニティなどを支えるネットワークとしての非市場経済がある。この非市場経済は、しばしば社会経済やコアエコノミーとも呼ばれる。これは市場経済の基礎に存在するからである。コアエコノミーは、適切に機能するためには社会資本への投資が必要であり、社会資本は、互酬的社会ネットワークや信頼、市民参加、社会的連帯、そしてグループのヴィジョンや行動を含む集合的エネルギー「社会的エネルギー」として表される。タイムバンクは、このコアエコノミーを強化する方法の一つであり、これに特化して機能する道具は今のところあまりない。

タイムバンクのアイデアはどこからきたのか

タイムバンクは、1980年代にアメリカで立ち上げられたタイムダラーを起源に持っている。現在、アメリカでは、250以上の地域で様々な年代の何千人という人が活動している。タイムダラーでは、サービスだけではなく一部では財（コンピューター：シカゴ、家賃：ボルティモアなど）も入手することができる。

アメリカでは、寄付された財が取引にのぼっているが、イギリスで同様のことを行うと税所得として時間クレジットが計測されることになり、国から給付を受けている人にとっては参加が難しくなってしまう。イギリスの時間クレジットは、アメリカと同じく、今は無

税であり、経済的ではなく社会的に有益なものとしてみなされている。ただ、イギリスでも財の取引が全くないわけではなく、訓練に必要とされるもの、例えばパソコンなどが時折ある。

イギリスのタイムバンク

労働党政権は、自分たちの政策目的と合致するということでタイムバンクのコンセプトを採用している。第一に、タイムバンクは、社会に根差したボランティア主導の取り組みであり、個々の社会資本を生み出す能力、地域のサービスを改善する能力、能動的な市民権を支援する能力を高めてくれるからである。また国家への依存度を減らし、コミュニティ自助や自信をも高めるであろう。第二に、コミュニティへの参加において、不払いのコミュニティサービスの伝統的な提供者であった女性の参加が低下し、そして若者や高齢者、エスニックマイノリティ、失業者、低所得者の参加も少なく、彼らに対して参加への動機付けを行えるからである。このことにより、タイムバンクは、政府から資金援助を受け、またそのクレジットは、アメリカと同じく非課税扱いとなり、社会保障における除外対象となり失業者や低所得者が参加しやすくなっている。

イギリスではタイムバンクは、コミュニティの活動家が立ち上げたものよりも、既存の組織やグループ（例：コミュニティ機関、教育提供機関、健康サービス提供機関、地方政府、住宅組合、ボランティアグループ、図書館、地域通貨団体）に組み込まれる形で立ち上がったものが多い。

タイムバンクは、他の関係機関と共にどのような活動をしているのか

多くのボランティアグループが、新規参加者を獲得するための方法として導入している。通常のボランティア活動は、報酬を受け取ること無しに時間を提供するという一方向性のものであるが、タイムバンクは、互酬的に時間を提供し受け取ることもあるという双方向性のものである。タイムバンクのエトスとして、すべての人間は社会に提供できる何かを持っており、常に与え受け取るという二車線道路にいるというものがある。多くの人々が、肉体的に、社会的に、経済的になどの理由で何も提供できるものがなく、求められた時に必要な支援を行う資源がないと感じているが、タイムバンクはそのニーズを満たし、信頼関係を構築するためのものである。

タイムバンクと LETS は、両者とも地域通貨であり、社会経済を強化するものである。ただ、LETS は、始まって 10 年を経過しているが、社会的排斥に対して有効な道具であるにもかかわらず、あまり成果を残していない。タイムバンクと LETS にはいくつか相違があり、タイムバンクは荒廃地域のボランティアグループや人々がアクセスしやすいように設計されていることをまずあげることができる。他の違いとしては、タイムバンクは、

* 交換を促進するために、サービスや参加者の一覧表ではなく、サービスの仲介者に重点を置いている。

* 労働と等価：LETS の取引は相対で価値が決められ、結果として市場価値が持ち込まれる。

* 資金提供プロジェクト、スタッフ、事務局がある。

イギリスのタイムバンクの全体像

2002 年 3 月現在、36 の活動中のタイムバンクがあり、13 が準備中である。1998 年以来、6 万 3000 時間以上もの時間クレジットがやり取りされている。2002 年 7 月にタイムバンクの全国調査が行われ、29 の活動中のタイムバンクのうち 12 (41%) から回答があった。その調査からイギリスの 3 分の 2 のタイムバンクが、都市で運営されていることがわかった。

表 1：イギリスのタイムバンクの所在地

所在地	比率
都市	66%
都市周辺	17%
地方	17%
計	100%

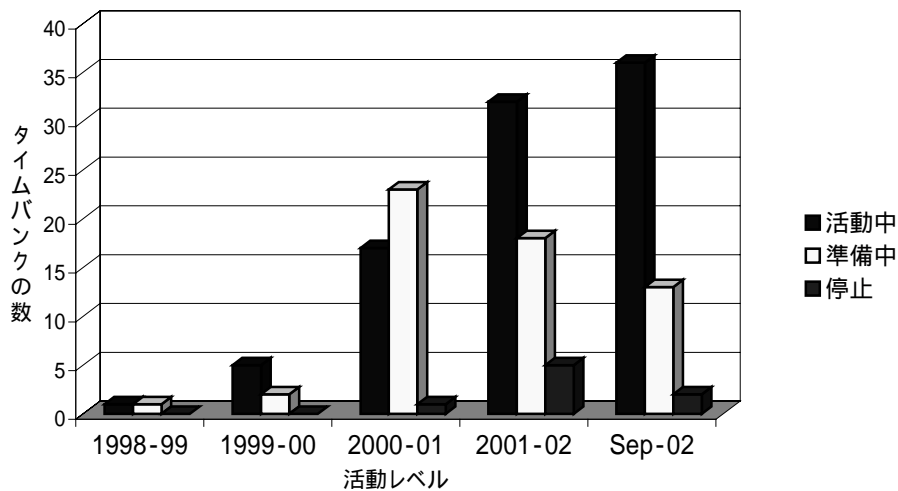
タイムバンクの資源

全国調査では、すべてのタイムバンクが、スタッフへの支払や運営費用を賄うために外部から資金を得ていたことがわかった。主な資金源は、コミュニティファンド（以前の全国ロータリーチャリティ委員会）であるが、他にも様々なチャリティ財団から受けている。多くのタイムバンクのコーディネーターは、社会サービスや住宅・健康などの予算から中央政府・地方政府が資金援助をすべきであると考えている。

活動の規模

2002 年の全国調査では、イギリスのタイムバンクは、参加者が 15 人から 107 人まで幅広い規模（平均 61 人）を持っていることがわかった。取り引きされた総時間は、70～5,635 時間であり、平均は 1,771 時間であった。単純にならすと、すべての参加者が 29 時間を与えたり受け取っていたりしたということになる。この調査から推計すると、現在（2002 年 9 月）の 36 のタイムバンクは、2,196 人の参加者、累計 6 万 3756 時間の取引が行われていることになる。また、平均すれば、参加者の 48% が、少なくとも月に 1 回ないし 2 回、時間をやり取りしているが、13% はまったくやり取りしていない。頻繁にやり取りされるサービスとしては、ガーデニング・荷物の移動・冊子の発行・軽い日曜大工・犬の散歩・コンピューター指導などである。

図 1：1998 - 2002 年間のタイムバンクの推移



どのタイムバンクも参加者が多いとは言えず、やり取りも活発とは言えないが、ほとんどのタイムバンクが最近設立されたばかりであることに注意しなくてはならない。平均した設立してからの年月は、1年前後である。

調査した団体(12)のうち11が2001年は会員が増加しており、3団体が当初の地理的活動範囲を超えて広がっていることがわかった。

表2：タイムバンクの発展

	2001年	2002年
活動中の数	15	29
平均参加者数	48	61
タイムバンク一行当たりの平均取引時間	1,052	1,771
参加者一人当たりの平均取引時間	22	29
6ヶ月以下のタイムバンクの比率(%)	33	46

タイムバンクがさらに成長するためには、様々な地域の団体の参加を募ることが必要であり、例えば雇用促進局、カフェ、地域の学校や生涯学習センター、教会、ガールガイド、ボランティアサービスセンター、信用組合、リサイクルショップ、フットボールクラブなどが挙げられる。

表3：運営年数別のタイムバンクの規模(2002年調査)

運営年数	数	比率	平均参加者	平均取引時間	一人当たり取引時間
1年以下	6	60	44	530	12
1年以上	4	40	85	3,597	42
計	10	100	61	1,757	29

表4：参加者のやり取りする頻度（n=5）

頻度	%
1週間に1ないし2回	17
1ヶ月に1ないし2回	31
1年に3ないし4回	39
なし	13

第三章 イギリスのタイムバンクの評価

ストーンハウス・フェアシェアーズ（グローセスターシャー）

このタイムバンクは、設立されたから4年経つ最古参であり、郊外に立地しており、コミュニティの様々な団体と良好な関係を保っている。102人の参加者、2,150時間の取引がなされてきている（一人当たり21.1時間）。このタイムバンクの活動は、比較的ゆっくりしたものである。コーディネーターによれば、参加者の60%は、1年に3,4回しかやり取りしないそうである。プロジェクト対象としては、高齢者や障害者であり、そのためかなり幅広い階層の人々、失業者、低所得者、年金受給者、そして3分の1は長期療養中の人である。ただ最近、参加者の幅を広げるために、若者を積極的に募っている。また、地域の学校教育とも結びつき、市民権の教育カリキュラムに組み込まれている。

ルーシェイグリーン・タイムバンク（サウスロンドン）

このタイムバンクは、サウスロンドンのイーストルイシャムにある保健センターの中にある。設立されたから2年経ち、64人の参加者、3,605時間のやり取りが行われている。活動は比較的活発であり、85%が1ヶ月に1,2回やり取りしている。ルイシャムは、この地方ではもっとも荒廃している地区であり、孤独に悩まされている人が多く、他人と接触し、他人から必要と思われることを感じ取ることが必要な状況である。そして、センターの医師がタイムバンクへの参加を勧めている。タイムバンクでは、基本的な日曜大工の技術を教えている。

グローバル・タイムバンク（グラスゴー）

2000 年末に活動を開始し、107 人の参加者、2,800 時間のやり取りが現在までに行われている。地域のコミュニティ団体との結びつきを強めようとしており、地元の祭りをサポート、祭りのボランティアに時間クレジットを配布した。ここのタイムバンクは、9,000 人いるインナーシティに位置しており、スコットランドでも社会的排斥が大きな問題となっている地区にある。例えば 1998 年のデータでは、失業率は 20.6%もある。この社会的排斥の解決を目指してタイムバンクは活動していて、相互性のあるボランティア活動を促進しコミュニティの能力を高めようとしている。

タイム・2・トレード（ウエスト・ミッドランド）

サンドウェルにあるこのタイムバンクは、健康と福祉の増進を目的としたものであり、この地方のもっとも荒廃した地区にある 3 つの住宅団地と結びついている。保健局からの資金で設立され、自助能力を高め、肉体的・精神的な健康具合を改善することが目的である。

タイムバンクの特徴：誰が参加し、なぜ参加するのか

地域における一般的な反応として、タイムバンクの理念は素晴らしいが、信頼とコミュニティへの帰属心が希薄なために自分たちの地域での実行の困難さを感じている。

表 3-1：タイムバンク参加者の特徴

	タイムバンク参加者 に対する比率	イギリス内での比率	既存のボランティア における比率
女性 (n=12)	67	52	52
退職者 (n=12)	42	19	19
障害者/長期療養者 (n=11)	20	13	3
所得給付受給者/失業 保険受給者 (n=2)	54	19	
非正規雇用者 (n=4)	72	51	40
低所得者 (£ 192/週 or10,000/年)(n=3)	58	38*	16
非白人イギリス出身 者 (n=8)	8	5	7

* : £ 250/週 or13,000/年

タイムバンクは、社会的に排斥されている人々を引き込むのに成功していて、それは既存

のボランティア活動よりも高率である。多くのコーディネーターが今までボランティア活動に携わっていなかった人々を引きつけていると断言している。彼らの推計ではそれは約半数以上である。タイムバンクの参加者は、かなりの割合（72%）で正規の職に就いていなく、所得補償給付を受けている割合も国内平均よりも高い。タイムバンクの参加者はほとんどが当該地域の住民である。

参加する動機

他人を助ける

社会ネットワークを構築する（いろいろな人と会い、友人を作る）

技術を共有し、コミュニティを作り、近隣を改善する

誰かに助けを求める

社会的市民権

信頼と互酬のためのコミュニティネットワークの構築

タイムバンクは、友人関係や信頼を構築すること、そして時間のやり取りを通じて社会ネットワークを拡大することによりコミュニティへの帰属心や連帯を高めていくとコーディネーターの大半は考えている。多くの参加者が、信頼や互酬の関係を構築することで近隣の改善に向けて着実に進んでいることを実感しているのが重要な点である。コミュニティの分離した部分をつなぎ、社会的、人種的、また年齢的に相違がある人たちとつなげていってもいる。相互の需要と供給を把握し、やり取りを活性化することと同じく、一緒にお茶を飲み、会話をし、友達を作ることも大切である。

社会ネットワークの構築と友人の増加

人々をコミュニティ活動に参加させるのを後押しするのと同じく、タイムバンクは、人々を出会わせ、友人を作らせる。この社会ネットワークへの参加は、自尊心や自信というものに対して大きな影響を与え、特に有益なサービスを提供する機会や求められたと感じた時にはである。

各世代とコミュニティとを結びつける

タイムバンクは、社会的に分離した階層（特に世代間）をつなげ、新しいコミュニティの間に社会資本を創り、既存の社会的絆を強めることができると考えられ、いくつかの事例（ストーンハウス・フェアシェアーズ：地域の学校との連携 学生と高齢者の交流・相互理解、グローバル・タイムバンク：学生同士のチュータープログラム 地域のこどもコミュニティ間のギャップの解消、進級する学校への進学支援）がそれを証明している。

時間は、有益な資源である：経済的市民権

所得を得て、生産的な仕事をしているという認識

タイムバンクは、個人や組織にとってコミュニティの他の参加者へサービスやサポート

を申し出る有効なチャンネルとなっており、「時間」をお金では買うことができない資源に変換し、そして何か価値のあるものを返礼している。時間クレジットを稼ぐこと自体は、タイムバンクへ参加する重要な動機とはなっていない。コミュニティへ参加する「楽しみ」そのものが動機となっている。ただ時間クレジットは、誰かに行う不払い労働を明白に認識するのに役立っていて、特に不払い労働を多大にこなしてきた女性にとっては言えることである。

ニーズを満たす能力と機会

タイムバンクのコーディネーターのほとんど(91%)は、相互性のあるボランティアを通して参加者の社会的、経済的ニーズを一部満たしていると確信している。これは、実践的な技術(ガーデニング、読み書き、語学、日曜大工)という形で現されている。提供された技術はほとんどが単純なものであり、日々使う技術であるが、それによって人々の生活に大きな影響を及ぼすのである。

雇用と訓練との関係性

訓練や雇用の機会へ直接つながる可能性がタイムバンクにある。基礎的な技術教育(インターネットの使用法など)、健康の改善や自尊心の回復、自らの能力への自信などが挙げられる。

政治的市民権

地域の組織との関係性増大

全国調査において91%のコーディネーターが、タイムバンクはコミュニティへの参加を促していることを認めており、それは参加者が今まで以上にコミュニティ活動に従事している事例が数多く報告されていることで裏付けられている。あるタイムバンクでは、コミュニティカフェで働いた参加者にクレジットを渡したり、近隣のゴミ拾いを行ったときにも渡したりしたりしている。

地域の政策決定権への関与

政策決定に参加した住民に報いるという参加型民主主義のモデルは、現在のタイムバンクにおいてはまだ多くは見られないが、将来的には構築されて行くであろう。選挙権の行使を拒否している地域、その多くは荒廃地域であるのだが、そこにおいて民主的な再生のための有効な道具となると考えられる。

社会構造と組織の再定義

タイムバンクは、価値、労働、市民権、生産活動への従事を定義する社会規範を再構築する機会となり得る。タイムバンクのコーディネーターは、参加者の大部分(72%)が正規に雇用されておらず、自らの労働が市場経済で価値付けられていないと考えている。しかし、タイムバンクの中では、すべてのサービスや技術は等しく評価される。彼らは明らかに所得を稼ぐ力を持っており、交換価値をもつクレジットを稼ぐために時間を使うことができる。平等主義的な労働の再価値付けに加えて、タイムバンクの参加者の67%

が女性であり、タイムバンクで通常提供される活動の質やタイプ、例えば家事やガーデニングなどは不払いを基盤として女性によって行われている特徴がある。コーディネーターの82%が、タイムバンクは社会の中の不払い労働に報い価値付けすることができると認識している。

第四章 学んだ教訓

成功に導く重要な要素

地域の状況にあったモデルを採用する：地域によってニーズやタイムバンクへの期待が違っている。

地域の強い存在感（プレゼンス）を創る

スタッフのために十分な資金調達先を確保する

地域の組織に基盤をおく：既存の組織や行政機関を通じて発生したタイムバンクは、単独で設立されたものよりも成功する可能性が高い。目的を共有した他のグループと共同することで、タイムバンクは、参加を増やす原動力となる。

プロジェクトの社会的側面を高める：参加者が一般に求めることとして、定期的な会合と気軽なミーティングが挙げられ、これによりまだ会ったことがない参加者の間をつなげ、友人関係を醸成し、交換を促進する。

タイムバンクへの参加動機を高める地域のビジネスを募集する：タイムクレジットで、カフェで割引を受けたり、映画のチケットや中古のコンピューターを入手できたりすることは、参加動機につなげる効果的な道具である。

地域のコミュニティグループの参加を募る

内なる障壁を乗り越えることへの挑戦

サービスを求める人を集める：タイムバンクが直面する大きな障害は、サービスを受けるよりも提供することを好むということである。理由としては、互酬性の概念が浸透していない（サービスを求めることの重要性を認識する）ことであろう。

提供されるものを多種多様にする：参加者がタイムバンク内で必要としているものが見つからない場合、活動の停滞を導く可能性がある。規模の小ささやビジネス参加者が少ないことが原因である。フェアシェアーズのように大規模なネットワーク組織になれば解消するかもしれないが、タイムバンクの参加者の多くは、近隣との時間のやり取りしたいと考えているためおそらくその方向性は無理である。

参加者と効率的に連絡しあう：参加者は、しばしばタイムバンクで何が起きているのかよくわからない、イベントから疎外されていると苦情を申し立てている。定期的に参加者と連絡を取り、タイムバンクに参加していると感じさせ、どのようなプロジェクトが動いていてどのように利用できるかを知ってもらう必要がある。ニューズレターやコ

コミュニティセンターでの掲示板、サービスリストを作成することも重要である。
マーケティングと宣伝方法を改善する

外部の障壁

タイムバンクの社会的認知度：一部のタイムバンクでは、人々の参加を募る困難さや批判・関心の欠如に直面している。

組織的な支援の欠如：組織的支援がないため、独立して始めたプロジェクトを運営するのに苦労しているタイムバンクがいくつもある。

持続的な資金源の欠如

より挑戦的な解決策としての採用：タイムバンクが幅広いサービスを提供し、社会参加への道具として政府が採用した場合、資金面の問題は解決するであろうが、実験的なレベルを超え主流のサービス提供者となってしまう。

社会保障における政府規制：現在、タイムバンクのサービスや時間クレジットは、所得税の対象とはならず、失業者や低所得者への所得補償給付にも影響はない。しかし、地域のビジネスの参加者が余剰物を寄付したり、サービスを提供したりすると給付規制に引っかかる可能性があり、また労働住宅省は財の交換自体を問題視している。そして障害者が、タイムバンクで活動をすると労働とみなされ、障害者給付金の減額対象になる可能性がある。

第五章 結論および政策提言：タイムバンクの今後について考える

タイムバンクの役割

タイムバンクは、近隣の再生や社会参加への強力な道具となりうることがわかった。そして、タイムバンクの主な利点としては、コミュニティへの参加の増大、社会資本の増強、コミュニティ内の階層を繋ぐ、コミュニティの自助を育てる、社会的に排除されているグループが社会的、経済的ニーズを満たすようにする、既存の経済における価値観への挑戦、が挙げられる。

タイムバンクの可能性を認めた政策変更

タイムバンクの可能性について政策立案者に伝える

コミュニティ全体の参加を募るために規制を撤廃する

社会的企業とタイムバンクがお互いを支え合うことができる道をつくる：イギリスはリユースやリサイクルがほとんど行われていなく、コンピューターや家具の再生を行いその訓練機会を設けることで、ゴミ埋め立て地を減らし、人々に新たな教育と生活の資源を提供することができる。社会的目的を持ったコミュニティビジネスとしての社会的企業が行う領域であるが、お互いが結びつくことで様々な利便性がある。タイムバンクは

外部資金への依存度が減り、参加者への報酬が得られ、社会的企業をコミュニティと繋ぐことができる。ただ実行するためには、それを支援する税制や社会保障政策の変更が必要となろう。

タイムバンクをコミュニティ参加者へ報いるものとして使用する

意味のあるコミュニティ開発に資金を提供する：時間クレジットと貨幣が対等となる社会を目指し、資金提供者となる政府や非政府組織が全体として時間口座と貨幣口座とを等しく扱い提供することを確認すべきであろう。時間クレジットと貨幣の両者のバランスをとることを認識するところから始まる。

地方レベルでの再生ツールとしてタイムバンクを使用する

高齢者へのケア政策を発展させる：タイムバンクは、病院内の「ベッド拘束」を解消する実践的な方法を提供する。日本では、高齢者への支援とケアが地域のタイムバンク（ふれあい切符等）を通じて提供されている。

相互性のあるボランティアへの道を開く

コミュニティカレッジを発起するために学習技術協会や他の訓練機関と組む

主流のヘルスケアの領域でタイムバンクを作る：タイムバンクは、保健サービスとして薬や技術的指導の代わりに親しく電話をするといった実践的な支援を行う。良好な人間関係や社会ネットワークへの参加は、食事療法や運動と同じくらい健康や福祉へ寄与する。重要なことは、コミュニティや近隣で活動的になるのと同様に自らの健康へ責任を持つ機会を与えてくれることである。

2003年1月31日

哲学 への いざない (13)

岩田 憲明

其ノ拾参：失われた物語

一般的な話になりますが、「主観的」という言葉と「客観的」という言葉のどちらの方が社会的に評価されているでしょうか。たいていは「主観的判断よりも客観的判断」ということで「客観的」な方が好まれるのが普通だと思います。社会常識からすれば「客観的」な事柄の方がより「事実即した普遍性を持つ」内容なのであり、一方「主観的」な事柄は個人の独断と偏見に染まった当てにならないものと見られているのではないのでしょうか。けれども、純粋に「客観的」な事柄があるのかどうかを考えてみると、案外この＜客観 - 主観＞の区別が恣意的なことが分かってきます。「事実即した」ものが「客観的」であり、万人に通用する「普遍的なもの」といっても、「事実」は単に私たちが感覚しているものに過ぎません。感覚そのものは私たちの感覚能力によって制約されたり歪められたりしますし、人によって「主観的」な違いが出てくる場合も多々あります。よくよく考えれば、「客観的」といわれるものの多くは何らかの形で「数値化」できるものなのであり、その数値によって万人に共通な「普遍性」を持つものと見なされているに過ぎないのではないのでしょうか。

以前、私は珍しく短歌会なるものに顔を出したことがあります。この時いわれたのですが、短歌というものは具体的事実を描写することによって普遍性を確保しているものであり、単なる抽象的な言葉のイメージでは短歌は成り立たないということでした。つまり具体的事実の描写がその普遍性を成り立たしめているわけです。けれども、本当にそうなのでしょうか。確かに事実として短歌が描写する何らかの事象があることは確かです。しかし、その事象が短歌という文学を通して理解されるかどうか、または描写されるに値するかどうかの判断はそれを読む側の人間にかかっています。以前、私が日本語教師をしていたときに、日本文学が外国人に理解されなかった例として次のものがありました。主人の葬儀をしなくてはならなかった女の人が淡々と自らの為すべきことをなしている描写とともに、彼女の悲しみを描き出すために「ハンカチを握りしめていた」という表現がありました。普通の日本人ならば、この表現を見ただけでこの女の人の悲しみの深さを理解できるのですが、ある外国人はこの表現のもつ意味が理解できずに、彼女はなんて冷たい人だろうと言ったそうです。恐らく、その外国人の母国の習慣では葬儀の場では悲しみを直接に表すのがむしろ礼儀であり、日本人のように何かに耐えていることを部分的なしぐさで理解する機会があまりないのでしょうか。日本人は自分の感情を表に

出すのを礼儀に反すると捉えています。多くの国々では礼儀とは自分の感情をいかに表に出すかを規定するものです。このように文化背景に違いがある場合、いかに事実を具体的に描写したからといっても、その描写の意図が「客観的」もしくは「普遍的」なものとして共通に受け入れられるわけではありません。それでも、映画でハンカチを握りしめる部分をクローズアップしたり、小説でその後の成り行きを示したりすることによって誤解を解くことはできるでしょうが、その場限りの短歌の場合、それは不可能です。

文学とは物語を語る一形式ですが、この文学がこのような客観的事実にこだわるようになったのは近代になってからのことです。日本では二葉亭四迷が「小説神髓」を書き写実主義を提唱してからこのような傾向が始まりました。逆にいえば、それまでの小説は今の娯楽映画やアニメに見られるファンタジーを多分に含んでいたわけで、SF小説を特にSFだと断る必要はなかったわけです。

前々回から「計ることのできるもの - できないもの」の対比で実証主義のことを取り上げていますが、近代文学にもこのような実証主義的傾向が入ってきたということができそうです。けれども、文学の場合、数値によって読者を満足させるわけにはいきませんから、「客観的」とおぼしき事実を写實的に描写することによってその実証性を確保しようとしたと見ることもできます。確かに近代の人たちにとって、真実こそが思想の普遍的拠り所となるべきであり、その真実は客観的な描写によって明らかにされるべきものであるというのが常識になっています。自然科学が数値を用いるのは、その数値が個人の主観に惑わされない形で事実を表現するからであり、そこには「主観的」個人に惑わされることのない「客観的」世界があるという暗黙の了解が潜んでいます。

けれども、実際はそうではありません。過去の多くの哲学者が指摘してきたように、私たちが感覚する存在は感覚されるままにあるのではなく、私たちとのかかわりでそのように私たちに感覚されているのです。もし私が赤や青として見ているものを逆に知覚する人がいたとするならば、その人に見えている世界を私が知覚すれば赤と青とが正反対になった奇妙な世界が現れてくるでしょう。けれども、その人にとってはその世界が普通なので、私とその人の見ている世界を覗くことがなければ、お互いの知覚が逆であることに気づかず、赤いものは赤そのものの色を客観的に持ち、青いものは青そのものの色を客観的に持っているとともに信じ続けて人生を終わるでしょう。

近代文学は写実主義から浪漫主義を経て自然主義へと展開していきます。浪漫主義の時代にはまだ社会に対する希望もあったようですが、自然主義の時代になると冷笑的、もしくは自虐的ともいえる私小説が登場してきます。小説というのは何らかの形で読者の感情を刺激しなく

てはならないので、客観的事実の描写だけでは成り立ちません。そうなると、何か劇的な事柄を周囲に求めるわけですが、そのような話は近くに転がっているわけもなく、また多くの小説家（志望）の人たちにとって社会は冷たいものですから、彼らが描写する現実には自然と暗いものになりがちです。人というのは一定の刺激に慣れるとより強い刺激を求めるのが常ですから、この暗い現実描写も徐々に演出されてきて、より暗いぬかるみの世界にはまっています。

ここまで来ると、客観的事実も一面的事実になってしまうわけですが、近代日本文学最大の巨匠である夏目漱石はこの傾向を「文芸の哲学的基礎」という講演の中で強く批判しています。つまり、客観的事実といってもそれは「我」とのかかわりの上で成り立つのであり、「理想」を失った単なる事実の描写は時として文学の持つ他の価値を損ねてしまうというわけです。しかし、その漱石ですら私の見る限り近代の実証主義の枠内に止まっているように思われます。というのも、この講演の中で彼は次のように語っているからです。

---。このうちで神は感覚的なものでないから問題になりません。もし文芸に神が出現するときは感覚的なある物を通じてくるのだから、出現するとしても、他と同じ分類のなかに這入るからしてやはり問題にする必要はありません。すると残るものは自然と人間であります。---（講談社学術文庫「文芸の哲学的基礎」38-39p）

確かに神は感覚できないものですからそれを直接的に表現することはできません。けれども、それは物語としても文学そのものがその全体を通して間接的に描き出すべきテーマです。前回に緩和ケアの話をしました。緩和ケアの前提となる死が何であるかを感覚的に語ることはできません。しかし、緩和ケアとはその死をめぐって患者とその家族をケアするのが目的です。このように、実証科学である医療の現場において「エビデンス・ベースド・メディシン」に代わって「ナレーティヴ・ベースド・メディシン」が問われているのは皮肉なことです。

死にしても神にしても私たちが直接感覚できる対象ではありません。しかし、私たちが生きている事実そのものをその意義を問うものとして根本的に規定してきたものだといえることができます。物語とは、本来、感覚的なものの描写を通じて感覚できないこれらのテーマを語ってきたのですが、文学という近代に特有な実証主義的な物語の形式には存在する場所を失ってしまったように思われます。

今回はこれらの感覚されないが故に直接的に語りえないテーマを語ろうとする現代の物語について、語っていきこうと思います。

The page features two large, thin, light-gray curved lines that sweep across the page. One line starts at the top center and curves down towards the right edge. The other line starts at the bottom left and curves up towards the right edge. These lines create a sense of movement and frame the text.

Gesell Research Society Japan.

<http://grsj.org>

info@grsj.org

copyright 2001-2003 Gesell Research Society Japan